下澤洋一博士をしのぶ

学長　加藤　寛

「冷静な頭脳と温かい心」という言葉を私は初めてお会いした時から下澤さんに抱き続けてきました。それは下澤さんが卒業当時はまだ草分けであった工業経営を専攻し，富士通ファコムに入社，さらに芝浦工大工学部にその道を選ばれたことにあらわれています。下澤さんはその経験を活かし，昭和63年４月から平成４年３月までの４年間，千葉商科大学に付置された研究機関である経済研究所の初代所長として，同研究所の研究基盤の整備充実に務め，よくその重責を果たしてきました。

この間，下澤さんは，交通経済学の研究に勤しみ，特に，首都圏における住宅立地と通勤交通について，ひたむきに研究を積み重ねられました。住宅立地に関する影響要因として家庭特性，所得，交通が家計の立地行動にいかに作用するかをモデル操作により分析し，東京都の西側地域における住宅立地パターンは，立地行動モデルによって十分説明されることを明らかにされました。その研究成果により，昭和52年３月，明治大学より商学博士の学位を授与されたのであります。

一方，本学教授として研究・教育に情熱を注ぐ傍ら，市川市総合計画審議会委員，市川市商業振興ビジョン検討委員会委員及び市川市交通対策審議会委員を歴任し，特に，市川市総合計画審議会においては，昭和56年８月より平成11年３月まで，６期12年にわたって委員を務め，なかでも第１期においては，同市の21世紀を展望したまちづくりの基本的な考え方を示す本構想を定めた総合計画の策定に，また，平成３年４月及び同８年４月には，それぞれ総合５カ年計画の策定にあたり，学識者代表としての立場から，常に広い視野と卓越した見識をもって，審議会の牽引役を務めるなど，同市の総合計画策定に多大な貢献をされました。

近年は，東京湾横断道路の南房総地域に及ぼす経済効果の研究にはげむなど，千葉県地域経済の課題と政策をライフワークに取り組んでいましたが，志半ばにして研究が中断してしまったことは，本人はもとより万人の惜しむところであります。下澤さんは，ご令嬢の挙式を前にして知人に出席を依頼したという，その父親とし

ての温かい心を示されました。ああ傷ましいかな惜しむべきかな。